

サンダル履きまま旅

5

◇カザフスタンと東トルクメニスタン◇

寺井融

Terui Torii

検問で一人7ドルの環境税 資源大国カザフスタン

前号に続いて、中央アジアの話をする。

五月一日、キルギスからカザフスタンの最大の都市アルマトイに、観光バスで入ろうとしたら、警察の車に止められた。検問である。環境税という名目で、一人七ドルが徴収された。

「本当に国庫に入るのかな」

「警察の裏金かもよ」

車中のわれわれは、勝手な想像をする。

カザフスタンは、わが国の七倍の面積である。

人口は約一千五百万人。広い大地に、石油や天然ガスが埋蔵されている資源大国である。ナザルバ



屋台の鍋料理（新疆ウイグル自治区）

エス大統領が、十七年間にわたり、政権を維持してきている。それらもあつて、いま、日本国内で

カザフスタン債券が、人気だときく。

一九九八年まで首都であったアルマトイは、ヨーロッパ風の整然とした街並みである。色とりどりの路面電車も走っていた。カザフ系やウイグル系などの有色人種だけでなく、ロシア系やドイツ系の白色人種も、四分の一強を占めている。

夜、薄暗いバーに入った。ドライマティニを片手に、肉感的で妖艶な女性ボーカルのジャズを堪能する。ここがアジアかとの思いにかられた。

中国国境は自主休業 急遽ジャルケント泊

翌五月二日、中国国境に向かう。ところが、行ってみると国境は閉まっていた。事件が起きたためではない。メーデーの翌日のため、自主休業にしてみましたためらしい。急遽、引き返す。午後も遅くなつていった。旅行者二十人と添乗員と通訳そして運転手の二十三人がひもじくなってくる。

そこでね、個人的に、タシケントの市場で二キロほど買い、積んでおいたビスケットを配ったところ、大変喜ばれた。本来なら、水と非常食などを用意しておくのが、添乗員の務めだと思うのだが…。

国境とアルマトイの中間にある町、ジャルケントに戻る。ホテルアジアという、たいそうな名前のアパートメントみたいなホテルが、一夜の宿となることになった。エレベーターがない。ボーイも

見かけない。自分で、トランクを三階まで持ち運んだ。重かった。

午後四時に、やっと昼食を終える。町を見て歩くが、小さな公園には人っ子一人見かけない。レーニン像だけが淋しく立っていた。東南アジアの田舎町で見かけるような屋根と柱だけの市場には、食料品のほかにほとんど売り物がなかった。

伊寧（イーニン）旅程カット

漢族が急増中のウルムチ

一日、寄り道をしたため、中国新疆ウイグル自



イスラム教徒の葬列（ウルムチにて）

治区のイリ・カザフ自治州の州都、伊寧（イーニン）の日程が、すべてカットされてしまった。残念。一九四五年十一月十二日に独立を宣言した、東トルクメニスタン共和国の本拠地である。いまでもウイグル族による反政府デモがよく起こる。流血沙汰となって、外国人立ち入り禁止となったこともある。因縁を知っている者にとつて、大事な都市なのだ。

結局、国境を越えて直接省都ウルムチに向かった。途中、イスラム諸民族と漢族が、画然と居住空間を分けて生活しているのが見てとれた。

一九四九年、ここに中華人民共和国の人民解放軍が進駐してきた。当時は、漢族は七%に過ぎなかった。現在は、優に三分の一を越えているようである。省人口は一千六百六十万人で、ウイグル人が九百五十万人。カザフ族ほかの諸民族もいる。ただし、「西域開発」の美名のもと、漢族が急速に増えてきていることだけは間違いない。

独学で日本語習得の漢族青年

アルバイトでマッサージ

事実、ウルムチのホテルで、マッサージを頼んだら、「今晚は」ときれいな日本語を話す漢族の青年が、わが部屋にやってきた。

「お客様は、日本のどちらからいらっしゃったのですか」

「埼玉だよ」



職業紹介の看板（ウルムチ）

「埼玉県といえますと、県庁所在地は浦和市（現さいたま市）でございましたね」

訪れた一九九六年当時は、確かにそうだったのである。

「日本語は、どこで習ったの」

「独学です。十年やりましたから」

当然という顔をしている。こちらは中高大、そして大学院修士課程と、十二年間英語をやつてきて、さっぱり駄目なのだから、脱帽するしかない。彼は、四川省の出身とのこと。大学で東洋医学

を専攻し、いまは大病院の勤務医だという。マツサージは、アルバイトなのである。

「私はですね、鄧小平に感謝しているんです。改革開放で、経済は明らかによくなりましたから：この先どうなることか、心配なのです」

中国は、指導者によって、大きく変わる国である。もう、教条主義の国には戻りたくないということであろう。どこの国に行きたいか、と訊いてみた。「一番は台湾ですね。総統選挙もやりましたし、民主主義国家です。発展していると聞いています



青空マーケット（ウルムチ市内）

から、見てみたいですね」

一九八六年、台湾に民進党が誕生したとき、中国の知識青年の間で「台湾の国民党は、ファシスト政権と言われていたけれど、野党を認めたじゃないか」との声があがったとき、総書記であった胡耀邦は、優秀な若者が共産党に入らなくなってくる、と嘆いたらしい。

「次に行きたいのは、日本ですね」

彼は、そう言った。

「じゃ、お金をためて、行けばいいのでは：」

つい、そう答えてしまい、しまった、と思った。当時、簡単に日本にやってくることは、できない時代だったのである。

「手続きが大変ですから」

「手続きじゃなくて、コネじゃないの」

「ええ、そうです。コネが社会主義の悪いところですよ」

病巣をしっかりと認識していた。あれから、十数年経った。現在の日本では中国からの観光客を受け入れている。彼は、憧れの国ニッポンに、やってきたのであろうか。

危険というマーケットを探訪

日本人と分かなり大幅値引き

ウルムチは人口二百万人とも言われ、近代的なビルが建ち並び、高速道路が縦横に走っている。

諸民族がたむろするダウンタウンのマーケットを、

この目で見てみたいと思った。漢族のガイド氏に、案内を請うと「あそこは危険です。ついこの前も殺人事件が起こりましたよ」と、拒否されてしまった。

そう言われたって、行きたいものは行きたい。友と二人で、タクシーでマーケットに乗りつける。よかつたですね。いろいろな帽子（諸民族によって違う）をかぶった男たちや、スカーフをまとった女性らをたくさん見かける。日本人だと分かったと、大幅に値引きしてくれたりもする。

近くにシテイホテルがあった。レストランでトイレを借りると、休んで行けと言われ、お茶までごちそうになつてしまった。もちろん無料である。

◇参考図書◇

入谷萌苜著『幻の「東突厥斯坦共和国」を行く』東方出版

今谷明著『中国の火薬庫―新疆ウイグル自治区の近代史』集英社

水谷尚子著『中国を追われたウイグル人―亡命者が語る政治弾圧』文春新書

■てらいとある 昭和22年生まれ、46年、中大法卒 雑誌編集者、新聞記者を経て現在、尚美学園大学 非常勤講師、ロングステイ財団広報委員、日本旅行作家協会会員、『サンダル履き週末旅行』（竹内書店新社）をはじめとする旅行記のほか、近刊としてエッセイ『裏方物語』（時評社）がある。